

「JENESYS2.0」

中国大学生訪日団第28陣

訪問日程 平成28年10月23日（日）～10月30日（日）

1 プログラム概要

中国日本友好協会が派遣した中国大学生訪日団第28陣（団長：袁敏道（エン・ビンドウ） 中国日本友好協会秘書長）計196名が、10月23日から10月30日の7泊8日の日程で来日しました。

本事業は「JENESYS2.0」の一環として行われ、代表団は東京・島根・広島にて、同じ専門を学ぶ日本の大学生との交流や、専門分野に関する視察・参観、ホームステイを通じて、専門分野への理解と日本の青年や市民との親睦を深めました。また、政治・歴史・文化・社会等さまざまな視察・見学を通じ、クールジャパンに直接触れ、日本に対する包括的な理解を深めました。

2 日程

10月23日（日）

羽田空港より入国

10月24日（月）

ボランティアグループ：日本のボランティア活動に関する講義、早稲田大学訪問・交流

日本語グループ：中国人学生の自然な日本語の話し方に関する講義、明治大学訪問・交流

共通：歓迎会

10月25日（火）

ボランティアグループ：砂町水再生センター視察、浅草寺見学、皇居・二重橋見学

日本語グループ：広島へ移動、農村民泊（広島県安芸太田町）

10月26日（水）

ボランティアグループ：江戸東京博物館見学、島根へ移動

日本語グループ：農村民泊（広島県安芸太田町）、三段峡見学、日本文化体験（神楽鑑賞）

10月27日（木）

ボランティアグループ：由志園見学、松江城見学、島根大学訪問・交流

日本語グループ：広島市中工場（清掃工場）視察、厳島神社見学

10月28日（金）

ボランティアグループ：島根県のボランティア・NPO活動に関する講義、ボランティア関連視察（1号車：認定NPO法人自然再生センター、2号車：NPO里山笑楽校、3号車：出雲市総合ボランティアセンター）

日本語グループ：広島城見学、広島平和記念公園見学、県立広島大学訪問・交流

10月29日（土）

ボランティアグループ：出雲大社見学、東京へ移動、商業施設視察

日本語グループ：東京へ移動、商業施設視察

共通：歓送報告会

10月30日（日）

ボランティアグループ1・2号車：羽田空港より帰国

ボランティアグループ3号車：日本科学未来館見学、東京タワー見学、羽田空港より帰国

日本語グループ：江戸東京博物館見学、皇居二重橋見学、羽田空港より帰国

3 写真



10月24日 ボランティア分団講義（東京都）



10月24日 日本語分団講義（東京都）



10月24日 早稲田大学訪問・交流
（東京都）



10月24日 明治大学訪問・交流（東京都）



10月24日 歓迎会で訪日の目的を語る
袁敏道団長（東京都）



10月25日 砂町水再生センター視察
（東京都）



10月25日 安芸太田町ホームステイ
(広島県)



10月26日 日本文化体験（神楽鑑賞）
(広島県)



10月27日 島根大学訪問・交流
(島根県)



10月28日 島根県のボランティア・NPO 活動
に関する講義（島根県）



10月28日 認定NPO 法人自然再生センター
視察・藻刈り体験（島根県）



10月28日 県立広島大学訪問・交流
(広島県)

	
10月29日 歓送報告会で訪日の成果を発表 (東京都)	

4 参加者の感想（抜粋）

○日本の一般市民に対する理解が深まったことで、より全体的に日本を理解でき、日本人の人々に対するこれまでの単一すぎる認識が変わった。今回の活動で日本人の温かさや礼儀正しさを実感した。同時に日本人の資質の高さに驚いた。

私はボランティアプログラムに参加したが、一人のボランティアとして、日本のボランティアの人たちが、小さなことから始め、とても純粋で単純な気持ちからボランティア活動に参加していることに尊敬の念を覚えた。こうした小さなことから始めるという形式は、とても素晴らしいと思った。また、島根県がボランティアとNPOの活動を結び付けて、高齢化問題の解決を図っていることを知り、とても良い勉強になった。総じて、日本の旅は私にとって大きな意義のある旅だった。

○日本に来るまでは、日本人の礼儀正しさは、テレビドラマで目にするサービススタッフのようなものに過ぎないはずだと思っていた。しかし、実際に来てみて、日本人の礼儀正しさや譲り合いは、一種の国民性だと知った。また、物事を行う際の周到さや細やかさ、綿密な計画性にも敬服した。私も見習いたいと思う。

ボランティアに関するさまざまな活動に参加する中で、私はボランティア活動をより神聖なものに感じるようになった。それぞれが心して参加すべきだし、助けを必要としている人たち一人一人に心をかけるべきだと思った。活動の形式は、表面的なものではなく、本当に自分たちに求められていることが何なのかを掘り起こさなくてはならない。ボランティア活動の尊さは、行動することとやり抜くことにある。日本でのボランティアについての講義を聞いた後、今後、国内でボランティア活動を組織する際にも、日本人の細やかさと気遣いの精神に学びたいと思う。

○毎日のプログラムがとても充実していて意義のあるものだった。どのプログラムでも日本人や日本に対する新しい発見があった。主催者側の至れり尽せりの配慮をととても光栄に感じた。

最も印象深かったことを挙げるとすれば、それは何と言っても砂町水再生センターと自然再生センターでの視察・活動だ。私たちに砂町水再生センターの説明をしてくれたのは、やや高齢のお爺さんたちだった。彼らの親切さ真面目さにとても感動した。彼らの説明により、私たちは水再生センターの業務の重要性を理解することができた。平凡だが決して簡単なことでは

ない。彼らがいるからこそ、人々の水の安全が保証されているのだ。美しい環境も正に大自然からのお礼だ。同時に、こうしたプログラムは、私たちのような将来の職業について考えている最中の学生にとっても、大きな助けになった。自分の力を尽くして社会のために貢献したいという気持ちが自然に湧いてきた。

自然再生センターでは中海で藻刈りを体験し、身をもって島根県の漁民の人たちの日常の仕事を体験することができた。とても意義のある体験だった。また、NPO 組織の活動についての情報も得ることができた。ボランティア活動を組織するにあたり、関連製品の販売面など、すべてが学ぶに値することばかりだった。

帰国したら、周囲の人たちに日本を宣伝し、紹介したいと思う。観光地の体験だけでなく、日本人の善良さや親しみやすさ、細やかなサービスを、彼らにも身をもって感じて欲しい。ボランティア活動の面では、学生の力、市民の力が存分に発揮され、小さなことから始める努力や、現実的な目標に感動を覚えた。教育面では、グローバルな交流や融和、理解を重んじる教育思想に、日本の一流の教育を体験してみたくなった。伝統文化や製品の宣伝販売面においても、名所や商業施設の参観時に一定の認識ができた。こうした各方面で見聞きしたことすべてを周囲の人々に伝え、本当の日本を知ってもらい、両国の友好交流を促したいと思う。

○ 1. 印象深かったこと

- (1) 日本のボランティア体系。日本は全国でボランティアがとても盛んだ。4人に1人はボランティアに参加しているし、東京から島根、若者からお年寄りに至るまで、“互助”の精神が存分に発揮されている。枝見太郎先生の講義では、日本全国のボランティア活動について詳しい紹介があり、早稲田大学と島根大学のボランティアプロジェクトもそれぞれ特徴的だった。実地見学した砂町水再生センターと里山笑楽校プロジェクトでは、環境保護分野、有機農業や耕作放棄地の再生分野における成果が素晴らしかった。これらすべて、中国が積極的に手本にする意義がある。
- (2) 日本人学生および一般市民の様子。2校の大学生との交流を通じて、日本の大学生の精神状態を知った。彼らはややシャイだがとても友好的で礼儀正しく、謙虚で勤勉だ。学業もクラブ活動も頑張っている。私はこれも一種の国民精神の表れだと思う。礼儀正しさや静かさは、既に日本の国民性になっている。しかしこれは決して活気がないということではない。親しみやすさや勤勉さ、勇敢さも大和民族の特性だ。彼らは学びを大胆にし、楽しむ。日本科学未来館と江戸東京博物館が東京に共存しているように、過去と未来が、東洋と西洋が共生し、すべてが日本の中で静かに変換され融和し、効率良く独特の和風を作り出している。
- (3) 日本の歴史と文化。天照大御神の伝説から現代の日本の復興に至るまで、日本の文化は何代にもわたって受け継がれるとともに、それぞれの時代で独自の色彩を有している。浅草寺と皇居二重橋の占いの方法には、中国と似たところもあったが違うところもあった。日本文化には中国文化の面影が見られるが、既に独自の風情を作り出している。

2. 伝えたい情報

- (1) 日本人学生と大部分の人々は友好的で、とても付き合いやすい。
- (2) 日本の歴史・文化・芸術等の分野は研究に値する。景色が美しく、空気が澄んでいる。
- (3) 日本には素晴らしい製品が沢山あり、経済の発展に独特の方式がある。

○今回の来日目的と任務は、ボランティア活動分野での交流だった。交流を通じて、最も印象深かったのは、日本は大都市だけでなく小さな農村でも、互いに助け合い、相親しむ文化が受け継がれていること、ボランティア活動には小中学生の頃から参加を始め、国民のボランティア意識を育てていること、企業の参加もボランティア活動に貢献していることだ。このことも学ぶに値する。

交流と同時に、空き時間もあつたので、私たちは秋葉原等の商業施設へも参観に行った。現地の人々の生活の様子、サービススタッフがとても親切なこと、道を行く車が自主的に歩行者に先を譲ること、ごみの分別管理が完璧で、人々が高い自覚を持っていることを知った。これらすべてにとっても感動した。

島根の旅では、大自然と直接触れ合うことができた。日本は高齢化が大変深刻な国で、特に島根県にある小さな都市では、若者はより良い生活を求めどんどん大都市へ出て行ってしまい、老人だけが取り残され、農地は耕作を放棄されている。しかし、里山笑楽校のような NPO 組織が耕作放棄地や廃屋を利用して、市外や市内で老人と子供を結び付ける活動をしている。高齢化が深刻な私たちにとっても、良い手本になると思った。

シンプルに言えば、日本は私に素晴らしい思い出をくれた。清潔、整然、空気、青い空、白い雲、小さな家々、友好的な人々が脳裏に深く刻まれた。また日本に来て、交流や学習をする機会がありますように。

○最も深く印象に残っているのは、由志園の参観学習だ。短い時間だったが、庭園芸術家の精巧な設計に驚嘆した。小さなところを言えば、苔や枯れ枝、エアプランツ、石斛等が巧妙に結び付いて、優雅な味わいを醸し出していた。大きいところでは、岩石や湖水、東屋、樹木の取り合わせにより、随所に情緒的な美しさが表れていた。景色の中に身を置くとまるで絵の中を歩いているようだった。こうした細部と全体を共に把握しているところに、日本人の緻密さや独特の設計理念、美学理解が体现されていて、とても啓発された。もちろん、印象深かったのは、美しい由志園だけではない。日本の人々の親しみやすさや礼儀正しさ、食に対する拘りや緻密さ、広く人々に浸透した環境保護意識、精巧で創意溢れる生活用品、大学における青年のボランティア活動状況も深く印象に残った。

帰国したら、周囲の人々に日本人の親しみやすさを是非伝えたい。毎回出発の度に、私たちが遠くへ去るまでずっと手を振って見送ってくれる。これには本当に感動した。それから、日本の精緻な食。食事前のアルコールによる手の消毒や毎回の食事の細やかな作りが、日本の生活の丁寧さを表している。人々の環境保護意識の高さや、独特の温泉文化、和服等の伝統文化、時間の厳守と物事を行う際の精神、それらすべてを周囲に伝え、共に学び手本にしたい。今回の日本の旅に参加できてとても嬉しかった。

○活動に参加する前は、日本のことをよく知らず、日本と言えば漫画を思い浮かべる程度だったが、今では、日本と言えば滔々として尽きない感覚がある。清潔さ、重なり合って趣のある都市建設、奥深い伝統文化、時間を厳守する日本人等すべてが深く印象に残っている。

中国国内では、ボランティア活動はまだ一種の“受け身”状態にある。ボランティア活動に参加する人はあまり多くない。しかし、日本ではボランティア活動は日常茶飯事だ。一人一人が皆自発的に奉仕し、人を助けることを喜びとする意識を持っている。ボランティア活動がも

たらず利点は、単なる団結や友愛ではない。それは家庭や地域、国にまで及ぶ。中国でもこのような国民の“ボランティア”意識の育成を重視すべきだ。

○はじめに、日中友好会館の今回の訪問に対する尽力に感謝する。行程は間もなく終わろうとしているが、すべての過程から、日中友好会館のこの活動に対する細やかな手配や心のこもった気配り、真面目な準備、豊富な内容が見て取れ、本当に得るところが多かった。

今回の訪問で、日本文化と日本のボランティア団体について、より深く理解し体験することができた。活動の中で、日本全体の清潔さ、丁寧さと静かさ、国民の資質の高さ、皆で衛生を保っていることを深く感じた。国全体に公共のごみ箱を設置しなくても、人々は皆ごみを自分で持ち帰る。人と人の交流や礼儀は、溢れる誠意を表している。自発的になされる親しみのこもった挨拶は、国民全体が互いに尊敬し合っていることを表している。都市全体がとても静かで、路上には大声で話す人はほとんどいない。ドライバーは常に静かに運転し、クラクションを鳴らすこともほとんどない。歩行者を見れば自発的に止まり、歩行者が渡るのを待ってから静かに動き出す。ボランティア分野では、政府と国民の関心が非常に高く、システム全体が完璧だ。例えば、出雲市総合ボランティアセンターでは、沢山の高齢者が何十年もずっと自身のボランティア活動を続けていた。自然と敬服する気持ちになった。日本人は友情や活気・活力に満ちていて、本当に感動した。

最後に、将来また日本に来るチャンスがありますように。ありがとう。さようなら。

○ボランティア分団の活動の中で、一番印象深かったのは、島根県の出雲市総合ボランティアセンターの見学に参加したことだ。よく知られている通り、日本は高齢化が比較的深刻な国で、出雲は特にその点がはっきりと表れていた。しかし、想像していたような活気のない様子とは反対に、出雲市総合ボランティアセンターの“高齢”スタッフ——仲睦まじい親しみやすいお爺さん・お婆さんたちは、笑顔で私たちに愛に溢れた感動的な話をしてくれた。折り紙教室でも、歌の教室でも、言葉を越えた交流があった。二つの文化が教室の中に知恵の花火を打ち上げた。すべての活動が歓声と笑顔に満ちていた。ボランティアたちは助けを必要としている人に無償で援助の手を差し伸べていて、私たちはとても感動した。善良さより美しい歌はない。笑顔より美しい表情はない。離れ難さとプレゼント交換の嬉しさが入り混じった雰囲気の中で、私たちは出雲での行程を終えた。私はこの時のことを永遠に忘れない。可愛いお爺さんお婆さんたちのことを絶対に忘れない。本当に可愛い人たちだった。

今回の活動を通じて、私は日本がいかにボランティアを重視しているかを知った。地震・津波災害の多い国として、日本では助け合いが深く根付いている。政府主導で、国民に自主的に国のために時間と精力を捧げるよう、同じ空の下に暮らす同胞のために自分の力を尽くすよう促している。我が国は土地が広く人口も多い。もしも日本の“全国民ボランティア”精神を私たちのボランティア活動に持ち込めたら、習主席の掲げた“中国ドリーム”構想も早期に実現するに違いない。日本でのすべての印象深かったことの中で、私が最も素晴らしいと思い、祖国に持ち帰り発揚したい良いところだと思ったのは、何をするにも真面目に対処し、少しも手を抜かない日本の態度だ。所謂“管の穴から豹の斑紋を見ても一つしか見えない。”で、七日間の旅の間、私は一つの小さな穴から私の知る素晴らしい日本を見たに過ぎない。将来、私に再びこの地を踏ませてくれるチャンスが沢山ありますように！

○今回の訪問で私が一番印象深かった活動は、出雲市総合ボランティアセンターでのボランティアの人たちとの交流活動だ。ボランティアセンター運営にかかるコストや、人力と計画の管理体制は煩雑かつ巨大だ。NPO や自発的な市民組織も、ここまで施設を完備し整えるのは難しい場合もあると私は心の中で思った。しかし、出雲という人口 65 万、高齢化率が 30%を越える地方の生活都市は、意外にもこのように強大な力と情熱を集め、下から上への方法でボランティア活動団体を起こし、市民組織の弛まぬ努力もあって、自治体のサポートと協力を手に入れていた。中でもボランティアが心血を注ぎ続けるのは、一朝一夕の個人活動であり、社会福祉に尽力する人々すべての力を集めて身近な人を助け、周りの環境を改善することだ。このような他人に奉仕することや、社会のために努力する意識や行動に、とても感動を覚えた。とりわけ、グループ交流で私たちのために通訳してくれたボランティアの人は、普段はセンターの中国語のクラスで教えている女性だった。彼女の言葉から、専門の中国語教育を受けたことはないようにうかがえた。しかし、彼女は自分の知っている言葉と日本語の漢字を使って、頑張って私たちとの会話を続けた。彼女の手元には一冊の相当使い込んだ日中辞典が置かれていて、解らない言葉に遭遇すると素早く辞書を引いていた。その辞書の引き方の習熟度に、彼女が自身の趣味と人々の交流の役に立ちたいという初志を抛り所に、ここまで中国語に習熟したのだろうと思わずにはいられなかった。そのために費やされた時間や遭遇したであろう困難は、普通の人には想像もつかない。この女性の流暢ではないが却って両国国民の距離を近づける中国語が、この地の中国人を支援してきた意義はとても大きい。正にこのような、力は小さいが熱意に満ちたボランティアたちが、出雲市のそれぞれの分野で市民のために活動し、より良い生活環境を求めて努力し、包容力と思いやりに溢れた穏やかな社会を作り出している。これも私たち大学生ボランティアの目標であり趣旨である。私たちが今、模索し実践しているボランティア事業が最終的に到達すべき理想の情景だ。

既に広く知られている“細やかさ、緻密さ”を除いて、私は日本国民の温かさと友好的な大らかさを中国人に紹介したい。エレベーターに乗り合わせた知らない人同士が小さくお辞儀をしながら挨拶をすること、商店の店主が閉店後も客のためにサービスを続けること、トラックのドライバーが交差点で私たちに先に通るようにとライトで示してくれたこと、私たちを目的地まで連れて行ってくれたお婆さんのこと、日本人の見知らぬ人に対する関心と手助けは、既に一種の習慣になっているようだ。このことも日本でボランティア事業が大きく発展するための基礎になっているのだろう。我が国の国民も日本に来て、日本の人々の友好的な善良さを体験し、両国の相互理解と交流を促して欲しい。

○今回の中国大学生の一代表としての、またボランティアという身分での訪日を通じ、得るところがとても多かった。大学生のボランティア活動でも、政府主導のものでも、人々の自主的なボランティア活動だった。日本側は私たちのために細部まで行き届いた交流プログラムを用意してくれ、辛抱強く私たちの質問に答えてくれた。

今回の友好訪問を通じて、私は新しい有益な知識を得たいと渴望していた。より重要なのは、更に細かいところを学び、同時に中日双方間の友情を手に入れることだ。初めて日本を訪れ、その静かさと清潔さに驚嘆した。訪日前に日本の細やかな作風について聞いてはいたが、“百聞は一見に如かず”だった。日本人は自身の伝統文化を保存し保護し、ひいては新しい時代の物と結び付ける特徴があると思う。中国も手本とし学ぶ価値が十分にある。日本は単一民族国家で、人口も比較的多いが、日本の国民資質の自律意識に非常に敬服を覚えた。一人で行うの

は容易だが、各自がそれぞれ行うのはとても難しい。日本の今日のこの発展状況は、必然的な結果だと思う。

ボランティア活動の分野で、今一番深く印象に残っているのは——島根大学のビビット・ポイント制度だ。これはとても新しい考え方であり、制度である。ボランティアのニーズを満たし、学生のボランティア活動に対する興味をもかき立てる。たとえ、この制度がボランティア活動の無償性という原則に背いているとしても、校内でボランティア活動を広めるには、一つの良い方法と言える。これこそが私が日本を訪問した意義の在り方だ。新たな方法を見つけ、新たな考え方を学んだ。これこそ私がボランティアとしてずっと追求していく趣旨だ。

○1日目のセミナー——“中国人学生の自然な日本語の使い方”で、私は自身の日本語を話す上での足りない部分に気付いた。また、明治大学と県立広島大学の大学生との交流で、自身の日本語の聴く力と話す力を高め、日本の大学生の生活や彼らの考え方を知ることもできた。得るところがとても多かった。

8日間の日本訪問で、日本のさまざまな面が深く印象に残った。中でも最も印象的だったのは、広島市内のごみ処理場を見学したことだ。中国ではごみの分別は2種類——可燃と不燃のみだ。そしてその可燃と不燃にも明確な区別はなく、国民にもごみを分別するという意識が基本的でない。ガイドさん曰く、「日本では小学校から子供たちに対しごみを資源として扱う教育を始める。小学生が必ず見学する場所の一つがごみ処理場だ」と。私たち中国を振り返ってみれば、小さい時から環境意識の教育を始めるという面においては、やはり足りない点が沢山ある。日本のごみ処理場を見学して、私の心に一つの願いが生まれた。帰国したら、皆にごみ分別の良い点を積極的に広めたい。まず周りの人々に知ってもらい、徐々に影響を拡大させていきたい。

もう一つ印象深かったのは、ホームステイを通じて日本の農村の生活に触れたことだ。お父さんとお母さんはとても温かで優しく、一生懸命に私たちの望みを叶えてくれた。別れの時には、ずっと家の入口に立ち、ありがとうの横断幕を持って見送ってくれた。とても感動し、大切に心にしまった。お父さんとお母さんがくれたこの感動を周りの人たちにも伝えたい。日本社会も日本人も、私たちの偏った印象とは全く違う。身をもって交流をしてみて、ようやく互いに深く理解することができる。より多くの日本人学生たちにも、このようなホームステイを通じて中国人や中国という国のことをもっと知ってほしいと思う。そして両国の友好関係を更に深めたい。

○活動に参加する前までは、日本は清潔で綺麗な国で、日本人は規則を厳守する近寄り難い人々と思っていた。活動に参加してみて、日本はもっと精緻で、日本人は想像していたような近寄り難さはないが積極的に自分を出すことは少なく、中国のことをあまりよく知らないと分かった。

1日目に、中国人学生の日本語学習に関するテーマのセミナーを聞いた。学ぶ点が多かった。私は普段学んでいる日本語と日本人が実際に話している日常会話は違うという問題を、これまで一度も考えたことがなかったことに気付いた。もっと努力して日本語を学び、より深く日本を知りたいと思った。

今回日本に来て、印象深かった点は三つある。

第一に、日本が清潔で綺麗ということだ。日本でのこの数日間、どこへ行ってもごみ箱を見

つけるのは困難だった。しかし、建物でも道路でも非常に清潔で綺麗だ。日本の多くの建物は必ずしも真新しいというわけではないが、必ず整然としている。完備されたごみ分別体系や機関があるだけでは、まだ十分ではない。キーポイントは自発的なごみ分別意識だ。県立広島大学での交流で、日本人が日常のごみをどうしているかという話になった。交流していた3人の学生は、自分で袋を持っていてごみを家に持ち帰って分類すると言っていた。他人に迷惑をかけたくないからだそうだ。正にこのような国民のごみ処理意識があるからこそ、日本は清潔なのだろう。

第二に、双方の眼から見た相手という点だ。日本文化は中国にも広く伝わっている。特に、現代文化は中国の若者たちの間で流行している。しかし、まだ多くの中国人の日本に対する理解は、狭く偏っている。今回の訪日前、私は両国感情が良くないことが、日本人の私たちに対する印象や態度に影響するのではないかとずっと心配だった。しかし、日本滞在中、私たちは熱烈的な歓迎を受けた。特に安芸太田町の農家にホームステイをした時には、ホストファミリーのお爺さん・お婆さん・おじさん・おばさんたちが、とても温かく、自分の子どものように私たちに接してくれた。だが、日本のさまざまな業界での交流を通じて、私は、日本人の中国と中国人に対する理解度が一般的にとっても低いこと、そして偏った印象にとどまっていることに気付いた。

第三に、最後の一点だが、今回の訪日で日本の自身の伝統文化の伝承は素晴らしいと思った。厳島神社で着物を着た若い女性を見た。日本人の日常生活の中には、伝統の文化要素が依然として保たれているのだ。

○来日前から日本人はとても礼儀正しいと聞いていたが、全くその通りだった。来日前は、日本人は私たちに対してあまり友好的でないかもしれないと心配もしていたが、来てみたら優しくかった。ただ、おそらく多くの人は、中国人全体に対してあまり良い印象を持っていないだろう。私の努力でこの状況を変えられたらと思う。

一番印象的だったのは、ホームステイの時だ。お父さんに連れられ、小学生たちが舞台上で“神楽”を練習している様子を見に行った。間近で見学して心が震えた。特に、小さな役者たちの真剣な様子に感動した。彼らの多くが自身の興味から神楽団に加わり、小学一年生から練習を始めていることや、この神楽団が1535年から存在していることに、本当に感服した。現代の日本社会は、こんなにも自身の伝統文化を重視し、その瑞々しい生命力を保つ努力をしている。これは中国が学ぶべきところだ。ガイドさんの言った、「すべての人が一緒に参加してこそ文化と呼べる」という言葉がずっと記憶に残っている。役者だけでなく観客も非常に重要なのだ。市民文化センターの宣伝チラシには、沢山の演目が並んでいた。文化の伝播のための場を用意し、人々が皆参加できるようにしていて、とても感動した。

他の人たちに日本人の細やかさや周到さを伝えたい。例えば、ほぼすべての道路に盲人ブロックが敷かれていること、エレベーター・湯船・バスルームはすべて障害者用に設計されたものであること。ほんの小さな物にも独特な意匠がある。例えば、雨水を集めて流す樋や、使用後の水をトイレで再利用すること、背もたれの後ろの小さなテーブル。だが中国製品は人あまり優しくない。

今回とても残念だったのは、日本語レベルに限界があって、日本の友人に中国の文化や国情を紹介することができなかったことだ。今度日本に来る時には、必ず日本語をマスターして、日本の人々に我が国・中国をしっかりと宣伝したい。何故なら、日本の一般の人々は中国のこと

をあまり知らないと感じたからだ。今中国も急速に発展していて、どんどん良くなっている。

○明治大学を訪問した時、一人の日本人学生と交流し、彼女の中国に対する見方を尋ねた。交流の中で、実は日本の若者は中国をほとんど理解していないことが分かった。しかし、今回の訪問交流で知るまで私自身が理解していた日本も、不完全なものだった。だから今回の交流はとても意義があった。今後中日間にこのような交流の機会が、とりわけ青少年間の交流がもっと増えますように。国際意識を育て、狭い思想を減らすこと、これは青少年教育にとっても必要なことだ。

今回の訪問で、ガイドさんの言った一言がとても深く印象に残っている。彼は言った。「日本の小学生はまず二つの場所を見学する。一つはごみ処理場、もう一つは国会」と。その時、私はとても心を動かされた。日本人が児童教育を重視し、そのためにに行っていることは、私の認識を越えていた。もし、一国の子供が、小さい時からこうした体験・参加という形で、自己の環境保護意識と権利意識を育まれているとしたら、その国の未来と発展には何の心配もないと思う。

広島平和記念公園を見学した時、私は沢山の小学生が先生に連れられて、“少女と千羽鶴”の像の前で、自身の戦争に対する見方と平和への思いを発表しているのを目にした。一人一人、自分の宣言をしていた。その時、私は彼らの後ろに立って、その幼い声が自身の永遠の平和への願いを述べるのを聞いていた。感動で心がいっぱいになった。このような教育の元で成長した子供は、必ず寛容で平和な心を持つようになるに違いない。特に原爆被爆地で成長した彼らは、こうした学習を通じて、より平和を愛するようになるはずだ。

ホームステイでは、ホストファミリーの二人の子供、一人は小学生でもう一人は高校生だったが、二人ともその地の伝統文化である“神楽”を習っていて、しかもその中である役を演じていることを知った。彼らは二人とも好きで習っていた。私も“神楽”の舞台を見て、本当に感動した。このような伝統文化を子供が好きになり、小さい時から伝承を始めることは、易しいことではない。

帰国したら、私は周りの人たちに、日本で体験したすべてを話したいと思う。特に、日本人の子供の教育に対する重視、ごみの分別、日本の美しい農村、興味深い“神楽”、それから日本人の親切さ、親しみやすさ等々。もっと沢山の中国人に身をもって日本を体験してほしいと思う。そして、もっと多くの日本人にも中国を理解してもらいたいと思う。互いの交流と理解があってこそ、両国を本当に永遠に友好的に発展させていけると信じている。

○明治大学を見学して、日本の大学は施設や環境がとても素晴らしく、学生のあらゆるニーズを満たしていると思った。それに、さまざまな交流活動が沢山あって見識を増やすことができる。日本の若者との交流で、彼らの個人の能力がとても高いことを感じた。ほとんどが大学一年か二年の学生だったが、言葉遣いや礼儀等がとても優れていた。また、交流の中で、彼らが沢山のクラブ活動に参加していて、各分野の能力がとても高いことを知った。私たち中国の学生は学業以外、更に課外活動にももっと関心を持つべきだと思った。

今回の訪問で、二つのことが最も深く印象に残っている。

一つは、広島の安芸太田町でホームステイをした時のことだ。25年ぶりについに広島カープが日本シリーズの決勝に駒を進めたとのことで、現地の人々は野球に熱狂していた。広島各地の街角の至る所で、野球関連の旗やユニフォームを目にした。ホームステイの時、広島の人々

は自分でお金を出して広島カープを応援していると知って、感動した。日本国民のスポーツの試合に対する情熱と関心に、一つの国家の団結力と協同心が投影されていて、敬服の念を覚えた。二つ目は、広島平和記念公園を見学した時に、沢山の小学生が修学旅行で訪れているところに遭遇したことだ。彼らが千羽鶴を手に、記念碑の前で黙祷や祈りを捧げている様子を目にした時、一つの思いが頭の中を駆け巡った。二度と戦争が起こりませんように。この子供たちが平和な環境の元ですくすくと育ちますように。こうした小学生の時から平和意識を育てることに力を入れた教育法は、日本の戦争に対する深い反省を反映している。

帰国したら、家族や友人に日本の風土や人情、社会文化を沢山紹介しようと思う。日本に対する印象は、中日戦争時代にとどまっていることはできない。国から出て、自ら日本を体験すべきだ。日本は環境の美しい、インフラの完備された、環境保護や文化を大切にする国だ。日本国民は礼儀を重んじる、慎ましく勤勉な民族だ。

中日両国の関係がますます良くなりますように！

○自身の日本語を話す力を高めること、特に“中国人学生の自然な日本語の使い方”の講座を聞いた後、中国の学生は日本語の表現において、もっと自然さを追求することが必要だと思った。しかし、語学の習得にはやはり長い時間の言語環境が必要だ。日本語の表現力を向上させるには、日本に留学するのがやはり一番良い。日本にいれば自然に学ぶことができるから表現もより自然になる。

最も深く印象に残っているのはホームステイの晩のことだ。それ以上のことはない。ホストファミリーのお爺さんとお婆さんは、私たち三人を、村の神楽を見に連れて行ってくれた。その翌日にも市内の大きな劇場で、同じ古典演目“八岐大蛇”を観劇した。衣装もより美しく、大蛇の道具もより精緻だったが、それでも、村の小さな舞台の醸し出す民族色や、淡い郷愁にはやはり及ばなかった。

夜、お婆さんは小型の車を運転して、曲がりくねった山道を進み、私たちを一軒の木造家屋の前へ連れて行った。暖かいオレンジ色の明かりが建物から外へ漏れ出し、山の暗闇の中でそこだけが賑やかな一角になっていた。道には既に沢山の村の人々の車が停まっていた。お婆さんは私たちを呼び、もうすぐ始まるから早く靴を脱いで中に入るようにと言った。慌てて靴を脱ぎ中に入ると、そこには小さな舞台があった。私たちは舞台の下の畳に正座をして、八岐大蛇がどのように姿形を変え、音楽や太鼓の音色に合わせてどのように身体を震わせ、とぐろを巻いて戦うのかを見物した。太鼓のリズムがどんどん早くなり、歓声の中、現場の雰囲気が最高潮に達すると、大蛇の口から突如火花が噴き出し、部屋の中ににわかに薪の煙が立ち込めた。少しむせたが、私は春節に故郷に帰省して年を越した時のことを思い出した。お爺さんとお婆さんが炭火で豚肉を燻製にしている様子は、幼い頃の記憶として深く心に刻まれている。この演出で、更に故郷の親近感が加わったのは間違いない。魯迅の作品『社劇』に描かれている境地は、この時の賑やかな民族の雰囲気とも似た所があるようだ。日本で民間の神楽を見た私が、中国の村の風俗を思い起こした。本当に奇妙な感じがしたが、中国でも日本でも、農村の人々は皆生活と芸術を愛する熱い心を持っていて、民間芸術が、その熱い思いを余すところなく表しているのが見て取れる。

帰国したら、私は引き続き日本の民間芸術と伝統文化の分野の情報に注目し、周りのクラスメイトに日本の神楽を沢山紹介する。中日双方の芸術と文化のより深い交流を促し、相互理解に繋げ、互いに尊重し合えるよう導きたい。

○明治大学と県立広島大学の学生との交流を通じて、日本の大学生の学習生活について、ある程度理解した。日本の大学生は自身の専門の学習以外にさまざまなクラブ活動に参加していて、趣味の範囲がとても広い。週末にはアルバイトもして、毎日がとても充実している。この点は自分に足りないところなので、彼らを見習いたいと思った。“中国人学生の自然な日本語の使い方”の講義を聞いて、自身の日本語を話す力はまだまだだと分かった。もっと本場の表現方法で交流できるようにならなければならないと思う。

今回の訪問期間中には、印象深いことが沢山あった。例えば、日本の清潔で整った道路環境や美しい自然風景、至れり尽せりの公共設備設計等々。最も印象深かったことを一つ挙げなければならないとしたら、それはホストファミリーの家で過ごしたホームステイの時間だ。ホストファミリーは三世同居の家庭で、お爺さん・お婆さん・お父さん・お母さんと娘がいた。毎回食事の前に、料理を並べて皆が席に着いた後、お爺さん・お婆さん・お父さん・お母さんが、小さい娘に挨拶をさせる。娘はまだほんの3歳で、わんぱく盛りの言うことを聞かない年頃だが、大人たちに促されて恥ずかしそうに幼い声でこう挨拶をする。「みんなお茶はありますか？ではいただきます」それから皆で一緒に「いただきます」と言うのだ。この小さなことが正に礼儀の体現だと思う。私たちは常々、今、経済・科学技術は急速に発展していると言っているが、現代人は既に沢山の大切な伝統的品性を失くしてしまっている。しかし、優れた文化の伝承が、ただ口で言うだけでなく、家庭の日常生活の交流の中で体現されている。人生の先輩たちが普段の何気ない生活の中で、良き文化伝統を、身をもって下の世代に教えている。小さい頃から教え始めている。これこそが文化の伝承だ。

帰国したら、周囲の友人に日本の先端技術を紹介し、また自分で撮った日本の美しい風景を見せたい。そして、ホームステイでのホストファミリーとの生活や交流のことを話し、日本人の緻密さやさまざまな人に優しい設計についても紹介し、双方の認識と理解を促し、親密な友好関係を築きたい。

○今回の訪日で一番印象深く最も驚いたことは、道徳面から言って、日本国民の資質が非常に高いことだ。

東京の羽田空港で飛行機を降りたあの時から今日に至るまで、いつでもどこでも何をするにも、ガイドさんやホテル・商店等のスタッフが、とても誠実に、親切に対応してくれた。彼らは常に輝く笑顔と穏やかな声で、私たちに朝晩の挨拶をし、私たちのためにさまざまな問題を解決してくれた。この一週間で最も多く聞いた言葉は、「おはようございます」「こんにちは」「ありがとうございます」等だった。特に三段峠を観光した時、山道で沢山の登山客に出会った。明らかに互いに知らない同士なのに、皆が私たちに「こんにちは」と言った。私はとても驚き、感動した。中国では、このようなことは、たぶんとても少ないだろう！

以上、挙げた例は氷山の一角にしか過ぎず、今回の訪日で見聞きしたことの中に私が感動したことは沢山あった。帰国したら、家族や友人に私の見たこと感じたことを沢山話したい。両国がますます良くなりますように！

○実は、今年の4月頃だったと思うが、私たちの学校も日本の大学生の訪問を受け入れ、日本の大学生に二日間付き添った。私が個人的に思うに、湖北の日程は、私たちの今回の日本の日程のように素晴らしいものではなかった。私たちは日本の大学生を連れて湖北大学を見学した。

我が校は多くの施設面で確かに日本に劣っていると思う。むやみに卑下している訳ではない。ここで私が言いたいのは、湖北大学が開いた晩餐会での、湖北大学の学生の日本人学生に対する温かいもてなしだ。あの時、私は中日双方が正に今、友情を築いていると実感した。日本語科の学生は全員参加した。多くの一年生はまだ日本語がおぼつかなかったが、手振りや絵を描いて交流した。晩餐会では、皆で一緒に《朋友》を歌い日本の伝統舞踊を踊った。沢山の人が心からの涙を流していた。何を見学しようと、最終的には友情を築くことが目的だと思う。今回、明治大学と県立広島大学を訪問した。完全に満足とはいかなかったが、日本の大学生にも中国に関心を持ってもらえたらと思う。ネット上の情報だけでなく、中国に来て中国流のおもてなしと接客、中国人の温かい友情を体験して欲しい。

日本人の伝統文化の伝承と発揚。

今回、日本の伝統民間文化——神楽を鑑賞しとても感動した。私たちは前日の晩に安芸太田町で神楽の練習を見学し、そのすぐ翌日に広島で正式な神楽を鑑賞した。

練習では、下は高校生から上は 70 歳の老人までが演技を見せてくれた。しかも、彼らは皆アマチュアだった。日中は働き、家に帰ったらすぐ夜は練習だ。本当に神楽が好きだからこそ、彼らはこのように日々、神楽を継承・発揚し、保護できるのだと思う。翌日は、(別の市民団体による)劇場での公演を観た。商業公演の形を通じて、沢山のの人に神楽を知ってもらい、鑑賞してもらい、ファンになってもらうのだ。今年 4 月に鳳凰テレビで中国の“神舞劇”を見た。素晴らしい公演だった。私は中国人も日本人のように、全国商業公演を行うかコンテストを行うかして、このような優れた文化を盛り上げ、忘れ去られないようにすればいいと思う。

同時に中国の青年たちにも呼びかけ、中国の特色ある文化に関心を寄せ、精華を失わせないようにする。

○これまでは、日本人は親切ごかしだと思っていた。しかし、日本の方々と触れ合い、彼らの温かさと誠実さを感じた。同時に、これまでは日本人は乱暴だと思っていたが、来日後、日本人の緻密さや真面目さ、礼儀正しさに本当に心服した！

今回の訪日交流活動は、内容が豊富で、私たち大学生は日本の社会や文化、生活をしっかりと体験することができた。

一番印象的だったのは、ホームステイと日本の伝統文化・神楽の体験だ。これらの活動は、私たちに身をもって日本の生活と日本の文化を体験させてくれた。興味深かっただけでなくとても意義深く、私たちの考え方にも深い影響をもたらした。

広島の安芸太田町の農民の家庭にホームステイしたことは、本当に興味深い体験だった。日本の農村家庭のお父さんの車に乗った時の不安と期待の入り混じった気持ちから、だんだんと打ち解け、一緒に食事を作ったり、神楽を鑑賞したり、限らない楽しさに満ちた時間を過ごした。私たちは稚拙な日本語で彼らと交流し、自分の気持ちを伝えた。ほうれん草の収穫もし、加工場にも行って、生産加工の過程を体験した。とても充実した興味深い時間だった。それだけではない。私はホストファミリーと楽しく過ごすと同時に、日本の農村の美しい景色にも深く魅了された。精緻な造りの家々、綺麗な空気、清潔で静かな村と街道。私の憧れの生活だ。今後チャンスがあれば、必ず友人たちに紹介したい。

もう一つ印象深かったのは、日本の伝統文化の神楽を体験したことだ。正に中国の精華、京劇のように、日本の神楽は、例えば『もみじがり』『おろち』等限らない魅力に満ちていた。私は日本の伝統文化にとっても興味が湧き、日本の伝統文化の力強さと偉大な神聖さを実感した。